View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[新刊紹介] 南川高志著『新・ローマ帝国衰亡史』

その他のタイトル	[Book Review] The New History of the Decline and Fall of the Roman Empire
著者	西村 航
雑誌名	史泉
巻	120
ページ	23-24
発行年	2014-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023641

〈新刊紹介〉

南川高志著『新・ローマ帝国衰亡史』

（岩波書店、二〇一三年五月、二一二頁＋七頁、七六〇円＋税）

西村　航

長い間、ローマ帝国の衰亡をめぐっては多くの学者が原因の解明を試みてきた。一九七〇年代以降、後期ローマ帝国は「古代末期」研究のなかで活発に考察がなされており、単純な「衰亡」という見方は改められている。そうしたなかで、南川高志氏も近年、とくにローマ帝国衰亡の問題を扱ってきた。本書は、その問題意識に対する、意欲的な解答であるといえる。そのうち第一章から第六章までは時代順に政治史を追っており、とくにはっきりと衰亡が語られるのは第五章以降である。以下では、その内容を各章ごとに見ていく。

まず序章「二一世紀のローマ帝国衰亡史」において、本書はローマ帝国の政治的枠組みの意義を重視して国家の枠組みから衰亡史を描いたものであり、著者が考察の中心に据えるのは帝国の本質が顕現する辺境であると説明される。

続く第一章「大河と森のローマ帝国」で著者は、広い支配領域を持つローマ帝国と外部とのあいだに存在していたのは明確な国境線ではなく曖昧なゾーンであったことを述べる。さらに、ローマ人の観念には「民族」という区分が存在せず、「他者」なのかどうかを判別するのは「ローマ人である」という個人のアイデンティティであったという。そうした意識を持った各地の有力者が住民たちを支配することで、ローマ帝国は統合されていた。同様にローマ帝国の実体化に対してとくに大きな役割を担ったのは辺境の兵士たちである。ところがディオクレティアヌスが増やしていた辺境の兵力をコンスタンティヌス大帝は削減し、外部世界とローマ世界とのあいだが曖昧なゾーンに戻った。このことが帝国「衰退」の基礎要因になったと、著者は第二章「衰退の『影』」で指摘する。

大帝の没後ローマ帝国は不安の時代を迎えたものの、第三章「後継者たちの争い」によれば、コンスタンティウス二世が単独皇帝となってからも大帝治世からの対外的な強勢は揺らがなかった。むしろ、コンスタンティノープルの元老院が発展を遂げたことにより帝国東半の皇帝権力は強力なものとなった。次の第四章「ガリアで生まれた皇帝」ではユリアヌスについて説かれる。彼は皇帝としての治世一年八カ月のあいだに大きな意義のある政策を行っていないが、副帝としてガリアで過ごした期間中、大帝以上に政権の中枢部へ外部部族出身のローマ人を引き入れ、帝国西方を皇帝権力に強く結び付けたのである。

帝国の衰亡にとって大きな節目となったのは、ウァレンティニアヌス朝治世の三七八年におきたアドリアノープルの戦いである。第五章「動き出す大地」は、この戦いにおけるローマ軍の敗北が、帝国に意識上の変化をもたらしたと主張する。さらに第六章「瓦解する帝国」は、三七八年の戦いをさかいにローマ人は、外部部族出身者を「ゲルマン人」とまとめて捉え、敵視するようになっていったことを指摘している。五世紀になるとゴート族がイタリアへ侵入し、ゴート族撃退のためライン川沿いのフロンティアから軍隊を召還したことにより、フロンティアを統制下に置く帝国の政策は止まってしまう。この出来事はローマの、「帝国」としての意義が失われることになった画期であると著者は解釈する。

三七八年のアドリアノープルの戦い以降ローマ帝国は崩壊に向かった。そして諸部族がガリアからイベリア半島へ侵入し、さらにブリテン島におけるローマ帝国の支配権も損なわれることになる四〇九年に、帝国は西半の支配力を失ったのである。終章「ローマ帝国の衰亡とは何であったか」では、この三〇年の間にローマ帝国は衰亡してしまったのだと述べる。「ローマ人である」というアイデンティティは四世紀後半に変質し、代わりに登場した排他的なイデオロギーが、国家の威信と実体を失わせた。本書は、この変化がローマ帝国を衰亡させたのだと結論づけている。

以上が本書の内容であるが、評者が気になった点を最後に記しておく。とりわけ重要な事項として述べられた「ローマ人である」というアイデンティティは、四世紀の終わりに変質したのだと一般化してよいのであろうか。とくに、外部部族に対する反発は皇帝の権威が弱まることにより噴出したという著者自身の記述（一八五頁）は、反発の意識自体は以前から存在し続けていたのであることをうかがわせる。アイデンティティの変容と帝国衰亡の因果関係は、本書のように図式的な説明でよいのであろうか。

また、「古代末期」研究で扱われることの多い経済的な動向や社会の変化にほとんど触れられていないため、経済史や社会史の説明を望む読者には物足りないと感じられるかもしれない。しかし、著者はあえて論及しなかったのであろう。序章で述べられている通り本書は政治史を本筋に置くものであり、支配層の変質をじゅうぶんに描いている。一般向けの新書であるにもかかわらず、学術的な趣が感じられるのである。本書をもって、今後「二一世紀のローマ帝国衰亡史」はさらに活発な議論がなされていくことを期待できよう。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程）